



# 教会報ほんじよ

〒130-0011 東京都墨田区石原 4-37-2 TEL : 03-3623-6753 FAX : 03-5610-1732  
http://www.catholic-honjyo-church.org

## INDEX

- 「暮秋」  
主任司祭 パウロ 豊島 治
- 「司牧評議会からのお知らせ」
- 「敬老の祝福」
- その他



### 「暮秋」

主任司祭 パウロ 豊島 治

十一月のご挨拶を申し上げます

月の始めの一日に諸聖人の祭日を祝います。翌日二日に「死者の日」として祝い亡くなった全ての方の安息を願います。

聖人であっても、その途上にある方でも、友人・知人・家族を始め亡くなられた方を思って祈る時、最も真剣に祈られていることに気づくのではないのでしょうか。死者を念（おも）って祈る時、自分の心にある日頃の思い患いが癒やされ、清められているのです。

死者はこのようにして、「神の近さ」を私たちに感じさせてくれます。避けられない死。そして死が私たちに伝えるものについてモーリス・パンゲ著の「自死の日本史」のなかでこう述べています。

『我々は多忙さのなかに、われわれは死のことを、そしてそれと同時に、生のことを忘れてしまっている。しかし、現代生活の多忙さ、そのビジネスが常に滑らかに進行してゆくとは限らない。晴れやかに、かろやかに流れ動いてゆく現代日本の時間のなかにも、人間が生きている以上、暗い深淵が隠されていることに変わりはない。なぜなら、生きていく以上、死ななければならぬというものは、今も昔も変わらない真理であるからだ。』

（略）生とは刻々の死との闘いであり、そして一方では刻々の死への歩みなのであるから、死は常に生に現前していると言うべきである。急流にも似た勢いをもって人を押し流してゆく時間の流れにも、ときには停滞する淀みがあり、動かぬ淵があつて、そのことをわれわれに教えてくれる。偶然に、その淀みなり淵なりにおのが身を見出す者は、あの人生という急流とは何であるのか、それに何の意味があるのかを自問する。生が神秘となるときだ。（同）そのようなとき、人は自分の人生が与えられたものであること、しかもその与えられた生が自分の意志によるのではなく死に結び付けられていることを発見して愕然とするであろう。（同）死を意志する者たちの心は、あるときには、夜の空以上に暗いものである。しかしそのときでさえ、それはその限りなく暗さゆえに、いわばその負のエネルギーゆえに、一条の光を発するのではないだろうか。』

死者の月、私は本所教会の皆さんから受けた墓参り依頼を行います。谷中霊園、カトリック府中墓地、多磨霊園、カトリック五日市墓地に行つてそれぞれの墓に供花し祈ります。東京教区司祭の墓では直近一年に帰天された司祭の納骨が行われます。森司教様は献体の意思を表明されていたので四名の教区司祭が納められます。

西川神父様とは二人でカテドラルの近く六義園で語り合ったことを思い出します。周りの批判に対して西川神父様の本心を打ち明けられ、慈しみに満ちていました。

古賀神父様との最後の会話を思い出します。日本の教会のために聖座と行き来したときの思い出でした。悔しさもあつたでしょう。

星野神父様は「最近もう食事する力がない」という叫びが今もよみがえります。現代の効率主義と戦う宣教師として無念かと存じます。

坂倉神父様は大学で子供を膝にのせたまま講演をしている姿がでてきます。いたずらする子に「ケイやめなさい」という小声もマイクにはいり

和やかにになりました。司祭の境遇は司祭でないとはわからないといわれます。皆さんもつながらをもった方もおられるでしょう。感謝の祈りを捧げましょう。

翌月からはじまる待降節は私たちの間に神が来られることを待ち望みながら過ごすのですから、死を想うときの先には、信者として「いかに生きるか」ということも合わせて考えるを得ないのです。

最後に。森司教様と私の最後の会話はバス中でした。「本所教会の聖堂はもう建て直しを考える時期でしょ。どうなの？」

